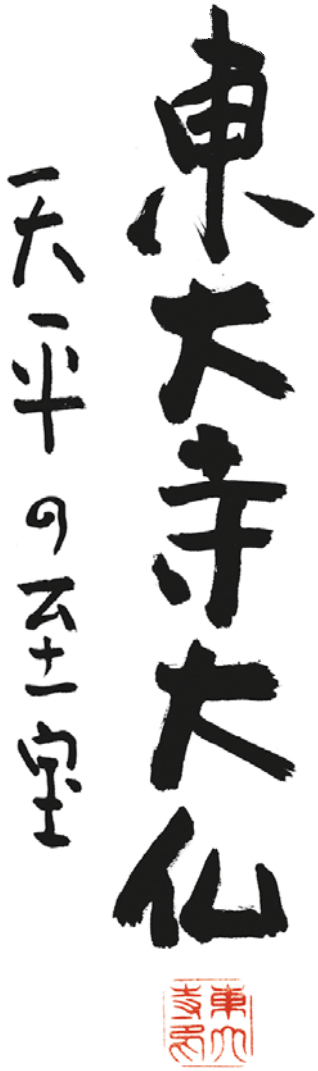


「奈良の大仏」で知られる東大寺・盧舎那仏に関わる東大寺の寺宝を中心に、天平文化の精華を紹介する、光明皇后1250年御遠忌記念特別展「東大寺大仏―天平の至宝―」を2010年10月8日（金）から12月12日（日）まで、東京国立博物館・平成館で開催します。

東大寺は、聖武天皇と光明皇后が、夭逝した皇子の菩提を弔うため造営した山房に始まり、やがて、聖武天皇の発願により盧舎那仏が造立され、国家的な仏教信仰の中心になりました。天平勝宝4年（752）には大仏開眼供養会が盛大に執り行われ、インド、中国の僧が参加するなど国際色豊かな文化が生まれました。後世の兵火により2度罹災しますが、そのたびに高僧らが復興、再建に取り組み、創建時の天平文化を代表する至宝が伝わっています。

本展では大仏造立に関わる作品を通して天平文化の精華をご覧いただきます。大仏殿前の高さ4.5メートルを超える八角燈籠（国宝）が寺外で初公開となるほか、古代の誕生仏では日本最大として知られる誕生釈迦仏立像（国宝）や、大仏開眼供養会などに使用された伎楽面（重文）など、天平の宝物を一堂に展示します。また鎌倉時代、江戸時代に大仏を再興した、重源上人、公慶上人の肖像彫刻の傑作などを通じて、今日まで脈々と伝えられる東大寺の歴史を紹介します。さらにバーチャルリアリティー（VR）映像で平安時代末期に焼失した創建時の大仏殿を再現、寺では見ることのできない盧舎那仏の背面を含め、360度ぐるりと大仏をご覧いただきます。

つきましては、是非とも貴媒体にて本展覧会をご紹介いただきたくお願い申し上げます。なお、広報用に出展作品写真の画像データ（JPEG）をご用意しております。ご希望の際は別紙の「広報用写真借用申込書」にてご請求ください。

主催者

≪ 開催概要 ≫

◆展覧会名　光明皇后1250年御遠忌記念　特別展「東大寺大仏―天平の至宝―」
The 1250th Memorial of Empress Komyo
Todaiji Temple and Monuments of Tenpyo Culture

◆会　　期　2010年10月8日（金）～12月12日（日）

◆会　　場　東京国立博物館　平成館（東京都台東区上野公園13−9）
Tokyo National Museum Heiseikan（Ueno Park）

◆開館時間　9：30～17：00
※ただし会期中の金曜日は20:00まで、土・日・祝日は18：00まで開館（入館は閉館の30分前まで）

◆休 館 日　月曜日（ただし10月11日、11月8日、11月15日は開館し、10月12日（火）は休館）

◆観覧料金　一般　1500円（1300円／1200円）、大学生　1200円（1000円／900円）、
高校生　900円（700円／600円）
*中学生以下無料
*（　）内は前売り／20名以上の団体料金
*障害者とその介護者1名は無料（入館の際に障害者手帳などをご提示ください）
*前売券は、チケットぴあ、ローソンチケット、ファミリーマート、イープラス、
JR東日本のみどりの窓口・びゅうプラザほか主要プレイガイドおよび
東京国立博物館正門観覧券売場（開館日のみ、閉館の30分前まで）にて10月7日（木）まで販売。

◆交　　通　JR「上野」駅公園口・「鶯谷」駅南口より徒歩10分
東京メトロ「上野」駅・「根津」駅、京成電鉄「京成上野」駅より徒歩15分

◆主　　催　東京国立博物館、華厳宗大本山東大寺、読売新聞社

◆後　　援　文化庁、平城遷都1300年記念事業協会

◆協　　賛　清水建設、トヨタ自動車、ニッセイ同和損害保険、藤田観光、文化服装学院、みずほ銀行、
光村印刷

◆特別協力　ソニー、ソニービジネスソリューション

◆協　　力　日本ヒューレット・パッカード

◆映像協力　凸版印刷

◆お問い合わせ　03−5777−8600（ハローダイヤル）
東京国立博物館ホームページ=http://www.tnm.jp/
展覧会ホームページ=http://todaiji2010.jp/
※会期中、作品の一部に展示替えがあります。

報道関係お問い合わせ先
特別展「東大寺大仏―天平の至宝―」広報事務局（ウインダム内）担当：沼澤、小高、妹尾
TEL.03-3639-0725　FAX.03-3664-3833　E-mail:todaiji2010@windam.co.jp
〒103-0014　東京都中央区日本橋蛎殻町1-28-9 ヤマナシビル4階

特別展　東大寺大仏―天平の至宝―　見どころ

東大寺大仏
天平の至宝

初公開
大型寺宝の迫力

大仏殿の前庭中央にある八角燈籠（国宝）は、2度の兵火から難をまぬがれた東大寺創建当初のものです。高さは4.5メートルを超え、羽目板や扉には楽器を演奏する音声菩薩（おんじょうぼさつ）、獅子がレリーフで表されています。大仏殿の東にある法華堂の本尊不空羂索観音菩薩立像（ふくうけんさくかんのんぼさつりゅうぞう）の光背（国宝）も、この時期の貴重な寺宝で、高さはおよそ5メートルです。いずれも寺外初公開です。

注目
天平の至宝

誕生釈迦仏立像（国宝）は、灌仏会（かんぶつえ）の本尊としてつくられました。おおらかで豊満な表現に天平盛期の特色がよく表れています。誕生釈迦仏立像がたつ大きな深皿状の灌仏盤の表面には草花や飛仙など天平の図柄が細かく刻まれています。また、金堂鎮壇具（国宝）の数々も天平文化の華麗さを示す貴重なものです。

勢ぞろい
彫刻の傑作

僧形八幡神坐像（国宝）、阿弥陀如来立像（重文）、地蔵菩薩立像（重文）、これらはいずれも鎌倉時代を代表する仏師・快慶の作です。重源上人坐像（国宝）は大仏再興という難事業を成し遂げた不屈の精神がうかがわれる肖像彫刻の名品です。鎌倉彫刻の傑作がそろいます。

期間限定
正倉院宝物

正倉院は大仏殿の北西にある東大寺の倉庫です。天平勝宝8歳（年）（756）、聖武天皇の死後、光明皇后が東大寺に天皇の遺品を奉納したのが正倉院宝物の始まりです。大仏開眼供養会で使われた品や光明皇后が集めた薬も保管されました。明治時代、国の管理になるまで、東大寺は千年以上も宝物を守ってきました。（11月2日～21日展示）

体感！
バーチャル大仏

最新のコンピュータ技術を駆使したバーチャルリアリティーにより、大仏を間近に体感できます。手や顔のアップや高い位置から見たシーン、いつもは見ることのできない背中などあらゆる角度から見た大仏の姿を高さ約7メートル、幅約8.5メートルの大画面で再現します。

東大寺大仏
天平の至宝

■東大寺のはじまり
聖武天皇の平和への願い

聖武天皇と光明皇后は、1歳になる前に夭逝した皇子を弔うために山房を営みました。詳細は不明ですが、大仏殿の東に位置する二月堂や法華堂のある、現在、上院とよばれる地域周辺にあったようです。東大寺の境内の山中には、東大寺創建より古い時期の瓦（1）の出る場所が複数あるので、その山房が発展したともいわれる金鐘寺（こんしゅじ）をはじめいくつか存在した寺を合わせて大和国国分寺である金光明寺（きんこうみょうじ）が成立したと考えられます。

聖武天皇が大仏造立を発願した天平15年（743）、当時、紫香楽（しがらき）（現在の滋賀県信楽町）に宮を遷（うつ）していたためその地で着工しましたが、天平17年（745）平城京に戻り、金光明寺に大仏を造ることにしました。東大寺という名前が歴史に登場するのは大仏の鋳造が始まった直後の天平19年（747）です。東大寺に現存する西大門勅額（2）に「金光明四天王護国之寺（きんこうみょうしてんのうごこくのてら）」とあるのは、東大寺が金光明寺の発展した寺であり、大仏が完成した後も、大和一国のみならず日本の中心的な寺院としての役割を担ったことを意味しています。

1. 法華堂付近出土品　三彩軒丸瓦
奈良時代〔8世紀〕　東大寺蔵

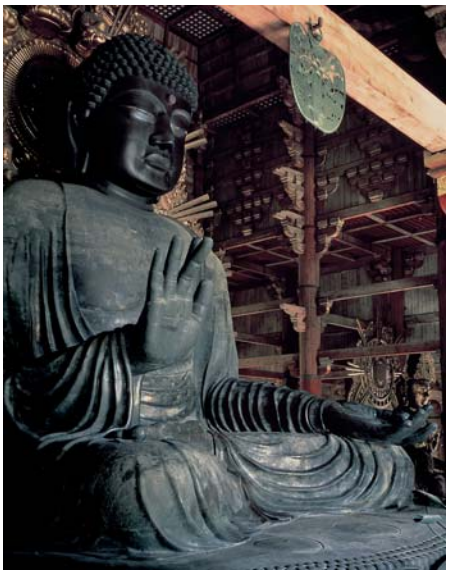
2. 重文・西大門勅額（ちょくがく）　奈良時代〔8世紀〕　東大寺蔵

東大寺大仏
天平の至宝

■大仏造立

なぜこのような巨大な銅の仏像を造ったのか？
また造ることができたのか？

天平7年（735）から9年にかけて、天然痘が大流行して多くの人々が亡くなり、天平12年には藤原広嗣（ふじわらのひろつぐ）の乱が起こるなど、社会情勢に不安が漂っていました。そこで、聖武天皇はこの大事業を発願し、『華厳経（けごんきょう）』の教えにもとづいた思いやりの精神が国民にひろがって、皆が幸せを感じる世界になるようによびかけました。また、資金だけではなく、労力も必要だったため、民衆を率いて土木事業を行っていた行基（ぎょうき）に協力を求め、「一枝（ひとえだ）の草、一把（ひとにぎり）の土を持って、像を助け造らんと請願する」（「大仏造顕の詔（だいぶつぞうけんのみことのり）」より）人たちが工事に自由に加わることができるようにしました。日本の隅々まで「ほとけ」の教えを行き渡らせ、理想的な世界にすることをめざしたのです。『華厳経』に説かれるように、無限に広がる世界に住む動物も植物も宇宙の一部であり、盧舎那仏がその中心に存在することを表現するために巨大な仏像が必要だと考えたのです。



参考写真：盧舎那仏坐像
（写真提供：植田英介）　※出品されません。

■大仏とは？

世界をあまねく照らす、平和のしるし

大仏の正式な名前は盧舎那仏（るしゃなぶつ）。サンスクリット語のヴァイローチャナを音写したもので「遍（あまね）く照らす」という意味です。つまりすべての生き物を慈しみ、育む「ほとけ」なのです。聖武天皇は盧舎那仏の光がすべての人々を照らすような、平和な国家をつくりたいと願ったのでしょう。盧舎那仏は蓮をかたどった大きな台座に坐っています。その台座の花弁の一枚一枚に無数の世界が線刻されていて、その中心で釈迦如来が教えを説く様子が表されています。それら無限の世界を照らし、慈悲によって包み込む盧舎那仏。聖武天皇は皆とともに平和な国造りをしたいと願ったに違いありません。

参考写真：東大寺大仏蓮弁線刻模様
※出品されません。

東大寺大仏
天平の至宝

■大仏開眼と天平の美

創建当時の至宝の数々

天平勝宝4年(752)、大仏の開眼供養会が行われました。インドから来た菩提僊那、中国から来た道璿も参加し、大仏殿の外では中国や東南アジアなどから伝わった伎楽など様々な楽が催されました。7世紀以降、日本は中国と正式な国交を結び、遣隋使、遣唐使の船が往来したため、遠くローマやペルシアなどからシルクロードを経て中国に伝わった文化が、日本にももたらされて、当時の都には国際色豊かな文化が花開いていました。

その際に使われたと考えられる伎楽面の酔胡王は酒に酔った胡人すなわちペルシア人の王、酔胡従(4)はその従者ですが、いずれも鼻がきわめて高く、東アジアの人々とは異なる民族であることを示しています。

東大寺には他にも創建当時の宝物が伝わっていますが、鎮壇具の銀壺(5)に刻まれた、馬に乗って鹿を追い、弓を引く人物の姿の図柄も中国より西方に由来するものです。金鈿荘大刀(6)に表された葡萄唐草文とそれをくわえて飛ぶ鳥、セミの形の銀製金具(7)などは、正倉院宝物とともに天平文化の華やかさを物語る貴重な例です。

3. 縹縷(開眼縷)　奈良時代〔8世紀〕
正倉院宝物(11月2日～21日展示)
開眼供養会で、大仏の眼に瞳を描く筆をつなぎ、聖武天皇、光明皇后ほか参集した人々が握って縁を結んだ紐。全長およそ200メートル。

参考写真:大仏開眼1250年慶讃大法要
(写真提供:植田英介)

4. 重文・伎楽面 酔胡従
奈良時代〔8世紀〕　東大寺蔵

東大寺大仏
天平の至宝

■大仏開眼と天平の美

創建当時の至宝の数々

東大寺金堂鎮壇具

5. 国宝・銀製鍍金狩猟文小壺
奈良時代〔8世紀〕
東大寺蔵

6. 国宝・金銅荘大刀（部分）
奈良時代〔8世紀〕　東大寺蔵

7. 国宝・銀製鍍金蟬形鏡子
（宝相華透彫座金付）
奈良時代〔8世紀〕
東大寺蔵

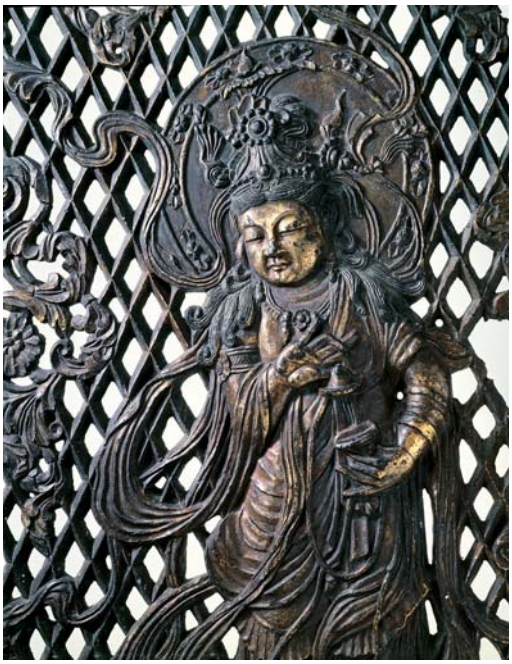
8. 国宝・誕生釈迦仏立像及び灌仏盤　奈良時代〔8世紀〕　東大寺蔵
4月8日に行われる灌仏会（釈迦の誕生を祝う法会）の本尊。像高10cm前後の像が多い古代の誕生仏の中にあって、像高47cmと群を抜いて大きい。

東大寺大仏
天平の至宝

■大仏開眼と天平の美

創建当時の至宝の数々

9. 国宝・八角燈籠　奈良時代〔8世紀〕
東大寺蔵
大仏に燈火をささげるためのもの。大仏殿は2度兵火によって焼けたが、大仏殿前に建つこの燈籠は被災を免れ、創建時のまま残った。扉に表された、優美な音声菩薩の姿は天平文化の優れた美意識を今に伝える。



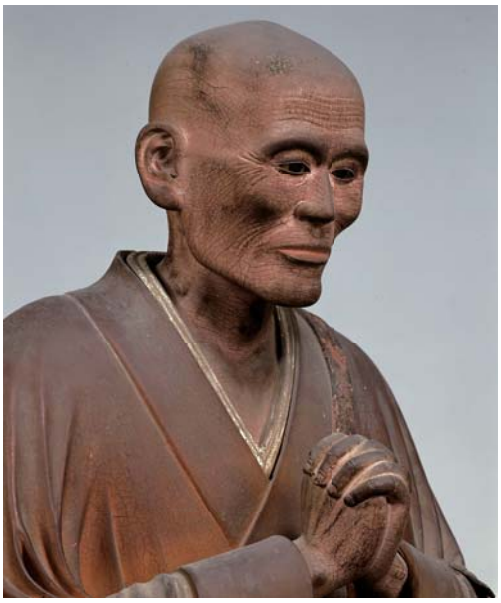
10. 国宝・八角燈籠火袋羽目板
鈸子（ばっし）をかなでる音声菩薩（おんじょう）（部分）
奈良時代〔8世紀〕　東大寺蔵

11. 国宝・八角燈籠火袋羽目板
横笛を吹く音声菩薩（部分）
奈良時代〔8世紀〕　東大寺蔵

東大寺大仏
天平の至宝

■戦災と復興の歴史

重源と公慶 ― 高僧たちの偉業をたどる



12. 重文・公慶上人坐像（部分）　性慶 作
江戸時代〔宝永3年（1706）〕　東大寺蔵

13. 国宝・重源上人坐像（部分）
鎌倉時代〔13世紀〕　東大寺蔵

治承4年（1180）平重衡（たいらのしげひら）が放った火が東大寺、興福寺を焼き尽くしました。東大寺は鎮護国家を祈る寺でしたが、朝廷に再建する資金はなく、その復興に力を尽くしたのが重源（ちょうげん）です。源頼朝をはじめ鎌倉幕府の武士ら有力者の支援を取り付け、さらに山口、岡山、兵庫、三重、高野山などに拠点を設けて、勧進（かんじん）を展開しました。重源は中国に3度渡ったと言い、再建された大仏殿、南大門には中国・宋時代の建築様式を採用しました。大仏の鋳造も中国人陳和卿（ちんなけい）の協力を仰ぎました。重源は特に仏師快慶（かいけい）とつながりが深く、各地の造像を任せました。東大寺にも僧形八幡神坐像（そうぎょうはちまんしんざぞう）（14）をはじめ、地蔵菩薩立像（15）など快慶の代表的な作品があります。

重源の風貌は東大寺に伝わる最晩年の肖像彫刻（13）にみごとに写されています。背は曲がり、目は落ちくぼんでいるものの、手はがっしりと大きく、鋭い眼光。不屈の精神を感じさせます。

大仏は永禄10年（1567）再度兵火に罹り、体の大半が溶けてしまいました。この時の復興には時間がかかり、大仏が完成したのは元禄5年（1692）。公慶（こうけい）上人（12）が勧進をはじめてから足掛け8年の歳月が費やされました。公慶は少年時代に、露座で雨に濡れる、顔を銅板で修復された大仏を見て再興を志し、成就したのです。

14. 国宝・僧形八幡神坐像　快慶 作
鎌倉時代〔建仁元年（1201）〕　東大寺蔵

15. 重文・地蔵菩薩立像　快慶 作
鎌倉時代〔13世紀〕　東大寺蔵

東大寺大仏
天平の至宝

■光明皇后と正倉院宝物（期間限定11月2日～21日）

聖武天皇、光明皇后ゆかりの品々

光明皇后は、奈良時代の初頭に政権の中枢にいた藤原不比等（ふひと）の娘。聖武天皇の皇后になり、天皇とともに仏教を深く信仰し、国分寺・国分尼寺の建立や大仏の造立を積極的に進めました。大仏開眼供養会から4年後の756年、聖武天皇の、四十九日法要の日に天皇の遺愛の品々を東大寺に奉納しました。「目にすると泣き崩れてしまいます。大仏の助けを借りて聖武天皇の霊が聖者となり、浄土にたどりつけますように」とその祈りを記しています。これが正倉院宝物の始まりです。その後、大仏の開眼供養会に使われたもの、天皇が東大寺に奉納したものなどが加わり約9000件にものぼります。

宝物は、中国から遣唐使が持ち帰ったインド、中国、東南アジア、ペルシアなどの外国の産物や製品、それらにならって日本で作られた当時の最高級品が、きわめてよい状態で保存されたものです。日本にはいない鸚鵡（おうむ）や象を表わした染物を屏風に仕立てた作品（16）、中国の画家の作に似た墨画の仏像（18）などが今回出品されます。

また、正倉院宝物の中には大量の薬が含まれています。光明皇后は、病気に苦しむ人々を救うため施薬院（せやくいん）を設け、多くの薬を集めました。大仏に奉納された薬もしばしば治療のために使われました。今回は多種ある薬の中から、桂心（17）、人参が出品されます。

16. 臈纈屏風（ろうけちのびょうぶ）　象木（ぞうき）
奈良時代〔8世紀〕
正倉院宝物（11月2日～21日展示）

17. 桂心
奈良時代〔8世紀〕　正倉院宝物（11月2日～21日展示）

18. 墨画仏像
奈良時代〔8世紀〕　正倉院宝物（11月2日～21日展示）

体感!バーチャル大仏

東大寺大仏
天平の至宝

本展では、実物大の大仏像を体感するバーチャルリアリティー映像コーナーを設けます。

大きな慈悲の心で人々を包み込む「大仏」は高さ14.98メートル、頭部だけでも5.33メートルあります。今回は、最新のコンピュータ技術を駆使したバーチャルリアリティーによって、大仏の魅力をあますことなくお伝えします。大仏殿で拝むことのできる正面の姿はもちろん、手や顔を高い位置から見たシーン、さらに通常は見ることのできない背中まで、あらゆる角度から大仏の姿をご覧いただきます。

また、奈良時代に創建された大仏殿の外観と当時の夜空を再現。『華厳経』に説かれた世界観をあらわした台座の蓮弁の美しい線刻も拡大して、聖武天皇、光明皇后が大仏に託した国民と国家の平和への祈りを伝えます。

バーチャルリアリティー映像は、高さ約7メートル、幅約8.5メートルの大画面で迫力いっぱいです。奥行き約23メートルの天井面にも創建時の空などが映し出されます。

参考写真：バーチャルリアリティー映像コーナー（イメージ）

参考写真：創建当時の大仏殿の外観再現（イメージ）